

関東大震災における東京市の食生活の考察

Dietary Life in Tokyo City Affected by the Great Kanto Earthquake

守真弓¹
Mayumi MORI¹

¹ 特定非営利活動法人高度情報通信都市・計画シンクタンク会議
Telecom-Society Corporations and Planners

要約

目的：関東大震災の文献資料のうち、当時の東京市で地震や火災から逃れて生き延びた人々の体験記等から被災食生活を考察し防災に役立てることを目的とした。方法：文献より「食」に関する記述を抽出し、項目ごとに整理した。さらにカテゴリー、注目ワードを記して分類した。結果：被災直後の避難に携行した食物や、ライフラインが途絶え、調達が困難な中でどのような食事をしたのかといった食生活がある程度知ることができた。関東大震災の体験者の記述からは、現代と異なる社会、食生活であっても、現代の東京で被災した場合にも危惧される食の危機的状況が起きていたことが示唆されている。

キーワード：関東大震災、東京市、食生活

Summary

Purpose: To utilize the result of document analysis of dietary life in Tokyo City affected by the Great Kanto Earthquake. **Method:** Sentences related to food, drinking water etc. were extracted from documents. The text was analyzed by editing by item, attaching category flags and words of interest. **Results:** What kind of food the people carried when they escaped from the disaster, how they survived the hardship during lifeline disruption and insufficiency of supplies, were grasped to some degree. It is suggested from the descriptions by the earthquake survivors that, even in the society and dietary life, different from those in the present day, the food crisis deeply concerned now, occurred at the time of the Great Kanto Earthquake.

Keywords: Great Kanto Earthquake, Tokyo City, dietary life

1. はじめに

防災に役立てることを目的として、関東大震災（1923（大正12）年9月1日）における東京市の被災者の食生活について一般の人による体験記をもとに考察し報告する。

主な文献資料としたのは、品川区が1978年（昭和53年）に編集発行した「大地震に生きる—関東大震災体験記集—」¹⁾である。関東大震災から55年経過した時点では、被災時の記憶を持つ人々がまだ多く存在していた。品川区が区内に住む関東大震災の経験者の投稿を募集し、寄せられた105人の体験記を編集したものである。これら経験者は1978年当時の品川区民であるが、1923年当時には品川区以外の場所を含む東京府・東京市の各地などに住んでいた人たちである。100年経過した今となっては貴重な証言集と考えられる。

また、染川藍泉著「志んさい日誌」復刻版²⁾を補助的文献資料とした。著者の本名は染川春彦、当時東京市京橋区の十五銀行本店の庶務課長をしていた人物で、同人『三昧』の俳人でもあった。「志んさい日誌」は震災当日大正12(1923)年9月1日から10月10日まで、勤め先の銀行で被災してからの職場の様子や、市内の状況や、私生活の様子を詳しく記している。

また、武村雅之編著「天災日記 鹿島龍蔵と関東大震災」³⁾も補助的文献資料とした。「天災日記」は鹿島組（現・鹿島建設）の理事長であった鹿島龍蔵が記した9月1日

から9月10日までの日記である。龍蔵の姉の夫である鹿島精一が3代目の経営者で組長であったが、精一の一家は延焼で深川の邸から焼け出され、龍蔵の居住する田端は無事であった。

その他、「シリーズ大正っ子」というシリーズ刊行から2冊を補助的文献資料とした。「シリーズ大正っ子」は大正生まれの人の自叙伝シリーズで、多賀義勝著「大正の銀座赤坂」⁴⁾と岸井良衛著「大正の築地っ子」⁵⁾を資料とした。多賀義勝の祖父は九州の小笠原藩士であったが新橋に料亭「湖月亭」、「花月楼」を開業した。義勝は父の広告業や親族の飲食店経営に従事しており、後に出版業界で長く働き、読書推進運動協議会の常務理事・事務局長を務めた。岸井良衛は弁護士の高男で、後に芸能プロデューサーとして活躍した。これらの補助的文献資料は大正時代の食生活や文化を知るための資料としても利用した。

これらの文献資料によるドキュメント分析から被災食生活を考察し防災に役立てたい。

2. 方法

(1) 抽出

ドキュメント分析を行うために、品川区「大地震に生きる—関東大震災体験記集—」より「食」に関する記述を抽出し、分類整理するために項目ごとに表とした。項目は「頁」「被災地」「性別」「年齢」「職業など」および

責任著者：守真弓

E-mail:yc6m-mr@asahi-net.or.jp

特定非営利活動法人高度情報通信都市・計画シンクタンク会議

2023年9月9日受付；2023年12月13日受理

Received September 9, 2023; Accepted December 13, 2023

「抽出記述」とした。表1に一部を示す。

表1

東京都品川区 編集「大地震に生きる一関東大震災体験記集」1978（昭和53）年3月31日					
頁	被災地	性別	年齢	職業など	抽出記述（）は場面
3	下谷区（台東区）竹町	男性	12	小学6年生	「母が朝炊いたご飯をむすびにしてくれていた。満水のたらいやバケツが荷物といっしょに並べてあった。」 （大井から静岡へ。山手線-長野駅乗り換え、中央線） 「長野駅では鉄道省からくばられたおむすびだけだったが、車が長野県の県境を過ぎて愛知県に入ると、駅ごとに町や村の人たちが食べ物や慰問品をいろいろと窓から出して私たちの手に贈ってくれる。」
10	下谷区竜泉寺町	男性	12	小学6年生	（母、弟妹と北千住の荒川堤へ） 「手には鉄びんと一本の鑿節が握られていた。この鉄瓶と鑿節がそれからの三日間われわれ六人の飢えと渴きを救ってくれた。」
13	両国駅構内	男性	21	千葉県津田沼鉄道第二連隊第一中隊	（両国駅も焼け、銀座経由で品川方面へ避難。品川寄り田町の中間） 「そのときやっと空腹を感じましたので、食物屋を探しましたが、見つからず、まごまごしていると、男の人が来て『兵隊さん、あそこうどん屋がある』と教えてくれましたので、早速飛び込んで、やっと空腹をみたしました。」

「志んさい日誌」より同様に抽出し項目を「頁」「場所」「日時」「抽出記述」として作表した一部を表2に示す。

表2

染川藍泉「志んさい日誌」復刻版（日本評論社）1981（昭和53）年8月10日				
頁	場所	日時	抽出記述（）は場面	
54	中庭	直後	（中庭にテントを張らせる） 「私は此時、事件が午餐前であったことに気付いた。炊事場には今炊いたばかりの飯があった。そこで小使達に握り飯をこしらえるやうに命じ、（中略）中庭のテントの中は先づ本陣というべきものになった。（中略）私は此時初めて地震に火事ということに気付いて、電燈のスイッチを抜くと命じたが、北野屋はスイッチは抜いたと言ってきた。」	
61	中庭	午後3時	「テントの内に居ると、小使が来て、握り飯が出来たから召上ってはどうかと伝ふ。宅に帰れば別にその必要もないし、腹もさほど空いてはいないしと思っただが、交通機関が総て途絶してしまっただけで、約六里というものを徒歩で帰らねばならぬから、腹ごしらえをしておくことはこの際必要だと思っただが、炊事場に握り飯を食べに行っただが、炊事場の所には立ちながら、握り飯を握んで頬張ってる人達が五六人居った。（中略）私はようよう一つ食べた。それも半分は碗に入れて水掛けにして沢庵で食べた。」	
80	浜離宮	夜	「私達のいた丘の根方の方に屯した人達の中、持ち出したおはちの飯を頬張っている女達があった。乳呑児を連れた女房があった。」 「何時まで此所に居るわけにも行かないが、如何にしたものであろうと聊か不安にも感ぜられた。それはいいよと伝ふ場合には、離宮のお濠を泳いで渡ってもと思っただ位である。お濠の幅は漸く十間位のものであるから。がそれよりも不安に思っただのは食料の問題であった。第一食料は何うすることであろうと感った。」	

「天災日記」より同様に抽出し項目を「頁」「場所」「日時」「抽出記述」として作表した一部を表3に示す。

表3

武村雅之編著「天災日記 鹿島龍蔵と関東大震災」（鹿島出版会）2008（平成20）年				
頁	場所	日時	抽出記述（）は場面	
9	上野→田端	9月1日	（院展を鑑賞、休憩所で被災。徒歩で帰宅）「山下の木村屋でパンを買って帰る事にし、松井氏店に入る。我等二人は戸外で待って居る。折々地震来る。（中略）講演に入り精養軒入口の処の水道栓をねじり、水を飲みつつ石に座してアンパンを食う。」	
12	自宅	9月1日	「米は平生の心がけて二俵の用意あり。家族ばかりなら一ヶ月を支え得る筈なり。副食物とかか蠟燭とか、炭だとかの買入れをなす。水は風呂に電気モーター（モーター）で汲み込んだのを大切にすることにする。」	
16	田端から日本橋へ	9月2日	（災害地視察に向い、焦土と化した銀座を見る）「精養軒の如きは其（そ）の一に何物をも見るを得ず。此（こ）の時迄多分残ったろうと思った鹿島組も遂に絶望である事を知った。」 「歌舞伎座は普請中の為め却って被害が少なかった。其（そ）の前を通過して兎も角も組の前迄行く。果たして全焼。其（そ）の焼け跡に一歩ふみ込んで見た。金庫が大小五六個寂然として無煙塚の如く立って居るのみで、地面は熱くして立って居る事が出来ない。」	
30	本郷経由で帰宅	9月2日	「只大学の一部が、焼けたのみなり。一度焼け残った市街に入れば、俄然として大混雑の修羅場となる。（中略）途中二三度、ふるまい水を飲み、とも角も無事帰宅。持って出た弁当は遂に喰う気にならず。其（そ）の儘（まま）持って帰る。」	

「大正の銀座赤坂」より同様に抽出し項目を「頁」「場所」「時期」「抽出記述」として作表した一部を表4に示す。

表4

多賀義勝「『シリーズ大正っ子』大正の銀座赤坂」（青蛙房）1977（昭和52）年5月5日				
頁	場所	時期	抽出記述（）は場面	
13	銀座通り	幼少～	「銀座通りの長寿庵という、その頃、ちょっと有名だった蕎麦屋の調理場とむかい合っていた。覗くといつも湯気でいっぱいだった。出前をたのむと、通りを過ってくる手間ははぶいて、いつも庭から届けてきた。私たち兄弟の大好物は「おかめ」である。厚切りの大きなかまぼこが嬉しかった。この店は、大正の末ごろ代替りして、私の父の知人だった人が、立田野という、当時の言葉で汁粉屋をはじめた。店はいまでも盛業しているが、経営者がその後どう変わったか、私は知らない。」	
15	新橋	不明	（勝海舟「氷川清話」（角川文庫）の一節の引用） 「料理屋について思い出したのは、このごろ珍しい人に行き会ったことだ。先日、奈良原繁（薩摩藩士、喜八郎、男爵）の家へごちそうによばれていったら、湖月（料理屋）の亭主だかといって、いろいろ立ち働いて周旋するものがある。よくよく見ると、この男はあんがいにも、昔、おれに砲術を習っていた多賀右金次という男だ。」 「ここに出てくる多賀右金次というのが、私の祖父である。九州唐津の小笠原藩の家老職の次男である。幕末のころ、藩命で兄と二人江戸に来た。勝海舟のもとで、洋学、砲術などを習得していたことは、『小笠原長行伝』その他別の記録にも出ている。親藩のことだったので、明治維新の動乱のときは、戦いをしながら敗走をかさね、会津の城下まで落ちのびていったという話を、子供のころよく父から聞かされた。」	
41	銀座	幼稚園	「私は祖母といっしょに通った。お天気のいい日は歩いていったが、雨が降ったり寒い日は人力車に乗った。たまには電車に乗ることもあった。お弁当のある日は、ひところ木村屋のパンに決めていたことがある。いまでも売っているアンパンや木の葉パン、紫蘇パンなどが名物だったのだが、その頃新製品として売り出された味のついたパンに干葡萄のはいったブドウパンが、私は大好きだった。」	

「大正の築地っ子」より同様に抽出し項目を「頁」「場所」「時期」「抽出記述」として作表した一部を表5に示す。

表5

岸井良衛「【シリーズ大正っ子】大正の築地っ子(青蛙房) 1980(昭和55)年5月5日			
頁	場所	時期	抽出記述()は場面
28	新富町	幼少～	「このころの僕たちのおやつは、印(はん)で押したように焼芋であった。ある日、家の窓から『おやつですよ』と焼芋を渡されると、それと同時に隣の恒川の春ちゃんが『はい、おやつ』と言って焼芋を持って来てくれたことを、はっきりとおぼえている。そのころの焼芋は今のよう高価なものではなかった。今では石焼芋とか大学芋とかがあるが、当時は焼芋といえば、小さければ丸ごと、大きいのは半分くらいに切って、鉄の平らな浅い大きな釜とも鍋ともつかないもので蓋をして焼くのである。」「もう一つは西京焼といって、これは一センチか一センチ五ミリくらいの厚さに切って、黒ゴマと塩をつけて同じ鉄釜で焼くので、焼芋といえばこの二つに限られていた。」
28	新富町	幼少～	「僕たちが小さい頃には納豆売りは『納豆、なっとう』と呼びながら売り歩いたもので、その声に応じて丼を持ってゆくと、納豆を居れた羹のツトから長い箸で納豆を器用にかき出して、ねった辛子を、その丼のふちに撫で付けてくれたものであった。納豆は一本とか日本とか註文をすれば、それだけをツトから出してくれた。したがって、ツトごとではなく、ツトは納豆屋が持って行ってしまったものであった。」「聞いた話によると、このツトを焼芋屋へ持って行くと、焼芋何本かと替えてくれたということであった。恐らくこのツトは火を付ける時に使われたのであろう。」
67	築地 小学校付近	小学校	「学校の裏にも文房具屋があって、その隣には木村屋というパン屋があった。お弁当を持って行かない時などには、このパン屋で食パンを買った。バタといってもピーナッツ・バターで、それとジャム、それでなければ甘辛といって、醤油に砂糖を入れたものをつけてくれた。生徒の間には、この甘辛は評判がよかった。僕はあまり好きではなかった。」「当時は食パンといえば今のイギリスパンの形のもの一種類であった。半斤が一人前で、それを二枚に切るのが普通で、三枚に切るのは特別注文で、せいたくであった。その上のせいたくは一枚にバタ、一枚にジャムをつけてもらうことであった。トーストなどはしてくれなかった。当時のトーストといえば家の長火鉢に網をのせて、その網の上にパンをのせて焼いてもらった。バタを塗って塩を少し振りかけたものであった。」

(2) テキスト補正

ある程度読みやすくするため、漢字使いの一部を、意味が分かりにくいため一般的なものに変えた。品川区「大地震に生きる―関東大震災体験記集―」の分類の際に「握り飯」「むすび」「たくあん」「タクアン」等複数の呼び名を便宜上、おにぎり、たくあんに統一した。

(3) 分類

「大地震に生きる―関東大震災体験記集―」の抽出テキストに以下の1)～5)のカテゴリ、注目ワードを付し

て分類した。

- 1) 避難
- 2) 避難生活
- 3) 食支援
- 4) 調達困難
- 5) 復旧の動き

表6に一部を示す。

表6

頁	被災地	性別	年齢	職業など	抽出記述()は場面	カテゴリ	注目ワード
271	横浜市西戸部町	女性	12	小学6年生	「私はいちばん下の弟を背負い、母は病気でねていた妹を背負い、小さい兄と弟はご飯のおひつと偶然足許に転がっていた梅干の瓶をかかえて、歩き出した。」「どこからか戸板を拾ってきて野宿し、持ち出したご飯を少しずつ食べて二、三日のいだことをかすかに記憶している。」	避難	おひつ 梅干し
281	横浜市南大田日の出町	女性	23	主婦	「水がやっと手に入るようになったのは、確か五日目だったと思う。このような大事なときは、救急箱と粉ミルク、大きなやかんに水を入れて持ち出すことを忘れないようにしたいものだ。」	調達困難	水 粉ミルク
287	南千住三の輪	女性	11	小学5年生	(常磐線のガード下で寝起き) 「一週間ほど前に田舎から米が送られてあったので、早速炊き、父と母がおにぎりをつくりました。私も不出来ながらもいっしょにつくり、二百個くらいでき、それを通行人の被災者の方々に差し上げました。」 (兄といっしょに茨城へ避難) 「二時間ほどで東北線の古河駅に着き、駅ではさつまいもを配給してくれました。」	食支援	米 おにぎり さつまいも

3. 分類結果

「大地震に生きる―関東大震災体験記集―」を中心に分類整理してまとめた内容は以下の通りである。

105の体験記のうち、72の体験記に「食」に関する記述があった。また、「食」に関する記述が無かった体験記のうち、25の体験記では記録末尾に[提案]を付して食料備蓄を挙げていた。当時の年齢は7歳から33歳で、14歳以上からは働いている人が多かった。以下、記述の引用の後のカッコ内に、投稿者の当時の年齢、職業など、および被災地(当時の地名)を示す。なお、夫々の体験記は震災から戦後まで生き抜いた人々の貴重な証言であるので、記述をできるだけそのまま引用することにした。

(1) 避難

関東大震災は1923(大正12)年9月1日、正午の2

分前に発災し⁶⁾、人々は職場や自宅などさまざまな場所で被災した。やがて「近所の男の人が大きな包を背負って帰って来た。『火事が広がって来たよ。通りも逃げて来た人が多くなって来たよ』といいながら、包をあけて、菓子パンを分けてくれた。」(14歳(中学生)被災地: 旧本所区向島中之郷町)とあるように、徐々に火災が広がった。次のような避難準備の記述がある。

「父はまた家にもどり、一升ビンや他の入れ物に飲み水を入れ、ガスの元栓は家をはじめ近所中開けて、火に気をつけるように大声で言い歩きました。次に、朝作ったごはんを全部おにぎり(おむすび)にし、梅ぼしやたくあん等用意し、赤ん坊のミルクや薬などを箱につめて、私たちのところへ運んで来ました。」(11歳(小学生)被災地: 港区芝大門町)

たった一人で決断を迫られた人もいた。「私はどうなることかと考えたが、相談相手もなく、ただ『落ち着く

んだ!』と自分にいい聞かせながら、まず朝食の残りの飯を全部食べ、持てるだけの荷物をまとめた。」(20歳(報
国貿易の住込み給仕)被災地:京橋区三十間堀)

逃げる時に食べ物などを持ち出した記述が多く見られた。「ふと気がついたとき、私の右手にはヤカンがあった。ちゃんと水が入っていて、誰が持たせてくれたのかおぼえていない。」(10歳(小学3年生)被災地:京橋区三十間堀)「私の持物はとみると教科書の入ったカバンと菓缶一個、水がよほど欲しかったらしい。」(13歳(女学生)被災地:京橋区加賀町)「私には二人の子供がおり、この恐怖の中で飢えさせることはできません。勇気を起こして家の中に入り、(中略)梅干と青菜、その塩漬と味噌漬とを持ち出しました。」(26歳(東京築地水交社員の夫人)被災地:蒲田区日枝神社付近)

「大正の銀座赤坂」でも、多賀(19歳)が炊き立てのご飯を移したばかりのおひつを抱え、弟に水の入った菓缶を二つ持たせて避難している。

調理器具まで持ち出した人もあった。「妻を外路にまたせて、僕は単身、崩れ落ちた障害物を取り除けて、二階に上り、重要書類や、一部の寝具および炊事用の鍋釜、米等を、崩れかかった窓の間から、窓外に投げ出し、七輪一つを抱えて、無事に屋外へ脱出することができた。」(31歳(報知新聞社員)被災地:芝明舟町)

人々は逃げるうちに、やがて喉の渇きに苦しめられた。「朝飯を食べただけだったのでお腹はすくし、暑いので、のどがかわき、飲みたくても水がなく困りました。こんなにのどのかわいた思いはあるとき以外ありません。(中略)上野の山を後方へ逃げて行く途中で、下谷の谷中を通ったらビールを売っている店がありました。あまりにのどがかわいたので、そこでビールを一本買って水の代わりに飲んだときの気持ちは未だに忘れることができません。」(26歳(草履製造者の下で働く)被災地:浅草区山谷町)

「のどはかわく、腹はすくが、足にまかせて歩いた。(中略)のどがやけつくようにかわいた。主人が持っているのが酒だと知っていたが、がまんできず一口入れた。そのうまさ!!」(27歳(主婦)被災地:本郷区菊坂町)

池の水を飲んだ人もいた。「空腹になる。水が飲みたい。しかし水道の水は止まっている。父はどこで手に入れたのかサイダーの空瓶に不忍池の水を汲んできた。私たちはかわるがわる飲んで咽喉をしめた。暑いのもっと水がほしいと思った。」(7歳(不明)被災地:神田岩本町)

「兄は、『昨夜お前に飲ませた水を見てきたが、青い溜り水だった。よくお腹を壊さなかったね』と私にいう。」(13歳(不明・目の治療のため上京、親戚の家に滞在)被災地:日本橋区馬喰横山)

空腹になると、持ち出したおひつのご飯、そのご飯で作ったおにぎりや梅干を食べた。「おにぎりやサイダーで夕食。ここも危ないと、竹町通りへ逃げた。朝になった。米屋さんに入ったら、だれもいない。サイダーを七本かりてきた。」(14歳(大手町電話交換台「見習」)被災地:浅草区福井町)

(2) 避難生活

空き地などへ逃げた人々は、食事に苦労したことを記述している。宮城前広場へ逃げた人は「水のない野宿生活で、お濠の水を飲んでいたのに、下痢をおこしたという話を聞かなかった。みんな精神力の賜ものかもしれない。」(11歳(小学生)被災地:日本橋)と記述している。

日比谷公園にも大勢の人が避難した。「3日目頃から、

食べ物や飲料水が欠乏してくる。日比谷公園内の池にたくさんいた水鳥や鯉は、誰かに食べられたのか一匹もいなくなった。私たちは池の水を飲んで飢えをしのいだ。」(25歳(深川森下町の住込み店員)被災地:深川区森下町)

知人や親戚を頼ることが出来た人々もいた。「3日目に赤坂御所へ移動し、近くの親戚に厄介になり、鯉節の入った握り飯にありついたときのおいしかったことは、五十年経っても忘れられない。」(13歳(女学生)被災地:京橋区加賀町)

郷里や親戚のもとへ疎開する汽車での食事についても記述が見られる。「二時間ほどで東北線の古河駅に着き、駅ではさつまいもを配給してくれました。」(11歳(小学生)被災地:南千住三の輪)

「長野駅では鉄道省から配られたおむすびだけだったが、車が長野県の県境を過ぎて愛知県に入ると、駅ごとに町や村の人たちが食べ物や慰問品をいろいろと窓から出して私たちの手に贈ってくれる。」(12歳(小学生)被災地:下谷区(台東区)竹町)

(3) 食支援

避難した場所で配給を受けた記述も見られる。上野の山で1日の夜を過ごした人は「谷中の警察から玄米むすび三個をようやくもらえた。」(14歳(深川工場勤務)被災地:浅草栄久町)

解放された浜離宮でも早くから配給があったが、それは直ぐに食べられるものではなかった。「夜が明けて六時頃、品川方面からトラックに白米を積んで来てくれました。一人五合くらいで、十人分頂戴し、皆の喜びは大変なものでした。母は早速、歌舞伎裏の自宅焼け跡から釜を持ち帰り、めしを炊いてくれましたが、釜が水を吸ってしまうので困ったそうです。塩を持っている人、梅干を持っている家族、みな持ち寄って朝めしを食べました。」(21歳(和服裁縫業)被災地:京橋区木挽町)

「(宮城前広場で)3日朝九時頃、宮内省の騎兵隊からカンパン二個ずつの配給があり、みんな地獄で仏に会った心持であった。」(23歳(勤労学生)被災地:神田三河町)

浅草の浅草寺でも配給があった。「3日目の朝には玄米のおむすびが配給になりました。またお米を配給するから行列をつくれといわれ、あの広い境内に二重三重と長い列をつくって、やっと三号ほどのお米を貰いました。(中略)その後しばらくは、毎日毎日、観音様の境内まで米、梅干、タクワン、ジャガイモなどの配給を貰いに行くのが私の日課でした。」(15歳(店に奉公)被災地:台東区浅草田町)

「何日かたって玄米が配給になりました。そのときは玄米もおいしかったのですが、今ではとても食べられません。」(9歳(不明)被災地:深川本村町)

「道路に並んで玄米のおにぎりやカンパン・缶詰の配給を受け、(中略)被災者としては恵まれた一週間でした。」(13歳(学生)被災地:深川区猿江町)

「このような騒ぎの中で、食料の不足は感じなかったが、品川町役場で小麦粉の配給があり、袋を持って貰いにいった記憶がある。」(10歳(小学生)被災地:品川区東品川)

食支援に関する記述の24のうち20は市民による支援であった。以下は、自らも避難したが炊出しに従事した人の記述である。「避難民はちょっとの間に広い場所にいっぱいになった。当時、青年団長だった講談社の野間清二社長の指揮で炊き出し、女三人もお手伝いをして、

おにぎり（おむすび）をこしらえて避難民に与えた。子を負ぶった母は、手を合わせて涙ながらに食べていたのが臉より離れない。」(27歳(不明)被災地:文京区と推測)

避難民の中にも助け合いが行われた。当時12歳の子供(被災地:小石川)は岩崎ヶ原という広場へ逃げたが、「下谷の方からぞくぞく逃げて来た人々に、母の実家(青果市場の間屋)から山のように運び込んだ西瓜をおまわりさんのサーベルで切って、みなにあげて喜ばれました。」と記述している。

当時11歳の小学生(被災地:南千住三の輪)は常磐線のガード下で寝起きしたが、「一週間ほど前に田舎から米が送られてあったので、早速炊き、父と母がおにぎりをつくりました。私も不出来ながらもいっしょにつくり、二百個くらいでき、それを通行人の被災者の方々に差し上げました。」と記述している。

上野へ移動する途中に、米屋で運び出してくれと言われた人(18歳(土木工事業に従事)被災地:下谷区入谷町)はそれを避難者に運んだ。「私は連れの若者たちと米四俵を貰って、山手線に止まっていた列車の中に運び込んだ。そのほか酒や醤油、味噌、缶詰なども手に入れた。(中略)博物館の近くに移動した。そこで避難して来た人たちに私たち若者が持ち運んだ食糧を分けてあげて、たいへん感謝されたものである。」

無事であった人たちも率先して避難者を支援した。製氷卸問屋・かき氷屋の子供(12歳(不明)被災地:荏原郡大井町)は母親と共に父親を手伝って氷を砕いて避難してくる人たちに配った。「3日目もブッカキ作りで泣きたい思いをした。氷にはオガクズが付いていたがワァワァと貰いにくるので、氷を洗う暇もなかった。しかしそのブッカキ氷を拝むようにして行く人、涙を浮かべて喜びを現わす人などを見て、手の豆の痛さを忘れるほどうれしかった。」

当時32歳の主婦(被災地:東京府下荏原郡)の所へは、2日の昼頃に知人が訪ねて来た。「お昼近くになって、池田に住む知人が友人三人と来て『電車がなく歩いて来た。家は火災にあい食べる物なく、着のみ着のままなので、何か食べさせてほしい』というので、米をたき、食べさせ、残りを握りめしにして持たせて帰宅させました。」

さらに、避難者は華族など富裕層の邸宅にも逃げ込んだ。当時17歳の桜橋興信所に入社3日目であったという新入社員(被災地:京橋区桜橋)は、頭と腰を打ち重傷を負うが、男性社員に助けられた。「その後、社員の方は私につきっきりで、親切におぶって、後藤新平さんのお邸につれていってくれ、おにぎりやら水をいただきましたが、そこにも火がついたので、築地の河岸に避難しました。」

当時33歳の彫刻家の夫人(被災地:品川町北品川)は、外国人が千名ほど抜刀してバルチザンのような行為をしながらやって来ると聞いて「岩崎さん(岩崎邸)へ避難した様子を書いている。「私はもうとっくに偵子をしっかり背負ってしまっていた。『じゃお父さん、私たちは岩崎さんへ行きますよ(略)』『ああ、よし』という。私は子供の綿入れと食料を入れたバスケットを右手に、左手に嚶子の手をひいて駆け出した。」

鹿島龍蔵「天災日記」からの9月2日の記述を次にあげる。「帰って見て驚いたのは家中人になって居た事で、僕の顔を見るなり、挨拶にと頭をそろえてやって来る。無論知った顔が主であるが、又知らぬ人も随分多勢である。家の中から外にかけて二百人位は居た様だ。無論知

人及び其(そ)の同伴者は屋内に、然らざるは戸外である。」

染川藍泉「志んさい日誌」からの9月2日の記述を次にあげる。「玄関の間の四畳半には、見も知らぬ避難者達が居る。此人達は門の所で泣いていたから内へ入れたのだと妻は言った。私が帰ったことを知って、玄関の間から首を出してその主人と伝ふ男は挨拶した。それが遂には感極まっておろおろと泣き出して私を拝むのであった。」染川は富裕層ではないが、当時日暮里町谷中本に藍泉居と名付けた二階建八間の家に家族4人、書生2人、および女中2人と住んでいた。こうした家にも避難者が逃げ込んで来た。染川も避難者を追い出すようなことはなく、「家族たちを大勢引き連れていて、そんな気の弱いことでは駄目だ、もう少し元気を付けて、この災厄に打ち勝たねばいけぬと私は彼を激励して、その主人と云ふ男にコップで葡萄酒を飲ました。」

「志んさい日誌」では翌9月3日の食事の記述がある。「女達は井戸端に出て、ひちりんに火を起こしたり、米を研いだりして、炊事に一時台所を賑はした。(中略)台所の飯の用意が出来る時、それを握り飯にして、皆避難の人達に配った。子供達は喜んで食べた。ほんの握飯と香の物だけであるが、此際何とも云へない味のものであった。」

また、多賀義勝「大正の銀座赤坂」でも、多賀の父の知人であり家主でもあった裏の寺へ一家で避難した後に、大勢の親戚知人が逃げて来たという記述がある。「赤坂の花月の伯母が手廻りの品だけを持って避難してきたのは夕刻だった。母の妹も新富町から大廻りして築地から木挽町をやっと抜けて、芝の山内から飯倉へ出たといって、手や足を傷だらけにしてやって来た。ほかにも持ち物を途中で捨てて命からがら逃げてきた親戚や知人をふくめると、三十人を越えて寺の本堂に入りきれなくなった。(中略)女たちと子供を本堂に寝かせて、私たち男は庭の樹に蚊帳を吊って交替で休むことにした。」翌朝は多賀の母が朝食の支度をする。「明けて二日、母は伯母のところの女中たちに手伝わせて食事を受け持っていた。そのころ、余り丈夫でないので私たち兄弟は心配をしたのだが、てきぱきと手を打つ采配ぶりは見事だった。ガスは止まってしまっていたので、炭屋から炭を届けさせた。水は寺に井戸があった。心配した米は私の家の出入りの米屋が間に合わせてくれるというので安心した。だが、副食物には困つたらしい。何分にも三十人を越す大世帯だった。これも結局は、平素取りつけの魚屋、八百屋、酒屋などが助けてくれたらしかった。余震もようやくおさまって、ひとまず落ち着いたころ、母がしかるべき品物をこしらえて世話になった札に歩いた時、私も同道したことを覚えている。」

(4) 調達困難

次は食料不足に苦しむことになった。「翌日からは食糧の不安な生活が始まったのです。姉の店先は人の行列で、一日でお店の中は空になり、娘の頃の私は驚いたものです。米の配給が始まったのは五日目くらいだったと思います。」(17歳(乾物商店手伝い)被災地:荏原郡桐ヶ谷)

「今度は食糧がなく、米や缶詰、醤油等いち早く売り切れてしまった。私どもは米がなく、親戚の埼玉県鴻巣村まで、リヤカーを引いてメリケン粉をもらいに行き、毎日スイトンを作って食べた。」(13歳(不明)被災地:荏原郡大井町)

父が『米屋に行って米一俵いくら聞いて来い』といった。私はとりつけの米屋で二十円と聞いて父に告げると、『高いな』といって買わなかった。(14歳(不明)被災地:上大崎)

「私の家では、井戸水でしたので水には不自由はしませんでしたでしたが、やがて米が高くなって買えず困りました。商人は米があっても売ってくれませんでした。」(32歳(主婦)被災地:東京府下荏原郡)

「志んさい日誌」では次のような記述がある。「地震の直ぐ後に、貯への米が少しだけしか残っていなかったことを知った妻は、出入の米屋に逸早く買ひに出掛けたさうであるが、一升しか売らないと言った。何と云ふ米屋であらう。一升二升の米で私達の家族と避難してきている家族達とが幾日食って行かれやう。妻は玄米でも可いから一俵売って呉れと交渉したら、米屋の阿爺、持てるならお持ちなさいと言った。妻は直ぐに書生達を連れて行って玄米を一俵持て帰った。その一俵の玄米が私達の十日間位の命を繋いだのであった。何處でも然ふであらうが、殊に此時日暮里辺の商人は悉く悪く、不届なものだと皆が言った。商人達は戸締りをして留主を装ほって居った。利己主義も時に依ることである。」

鹿島龍蔵「天災日記」では、9月4日に、世間の食料事情を案じた鹿島が近所の米屋を訪ねている。「朝七時澤田米店へ行く。宅の米を案じてにはあらず。災後最早三日を経過したる事故に、そろそろ一般的に食料の欠乏が始まりそうである。之(こ)れが人心を険悪にする最大原因であるから、此(こ)の辺の米屋供が集まって、供給を考うべきである。其(そ)の為めには、僕としても心当りを彼等に教え、彼等は役場の証明を得て、其(そ)の輸送から分配をなさば可なり、と思ったからである。然るに米屋は閉ざされて、主人の外出先が知れぬとの事であった。」

(5) 復旧の動き

復旧過程については、飲食店の屋台が増えて来たという記述がある。「日がたつにつれて救援物資も配給されるようになり、スイトンの屋台もたくさんできたので、道行く人の心もなごみ、微笑も見られるようになった。」(21歳(農商務省横浜生糸検査所勤務)被災地:横浜市)

その後の東京の様子は、ちょうど終戦直後のヤミ市の如く、上野あたりにスイトンやおでん等食物の商売が氾濫し、庶民をうるおしてくれたものでした。(8歳(小学生)被災地:日本橋区薬研堀(東日本橋))

染川藍泉「志んさい日誌」では、「最初に興ったものは、何よりも飲食店であった。ひもじい時の制しきれない欲望と、その傾向に迎合することが最も手っ取早いと思った人達は、皆食ひ物屋を初めた。」という記述がある。染川によれば、よしず1枚張れば商売ができたので、到る所に食物屋が出来たという。不衛生な状態で、蚊と蠅が異常に増えたとある。「さう云った食物屋には、国家の為に生きやうと思ふ人達は、決して這入る気にはなれなかった。併しこれらの飲食店に飛込む豪傑も沢山にあった。」

「そのような中、一軒だけ焼け残った魚河岸料理「大増」が大繁盛したという。染川は「大増」で食事をしたが、待っていても丼が来なかった。「かうなると弱肉強食で、どんどん人をせり分けて天ぷらの本もとに這入り込んで(原文ママ)、温かい所を貰って、元の自分の食卓に戻って来る、と云ふ風にやらなければ駄目な塩梅である。私は人々と共に丼を貰ひに出掛けた。(中略)その麦酒の

コップに盛った酒と例の皿とを自分で捧げて私は元の食卓に帰った。その間まるで戦争のやうである。」

多賀義勝「大正の銀座赤坂」では日比谷公園の様子を詳細に記述している。「旧音楽堂の前の広場に、バラックが立ちはじめたなど思っていると瞬く間に増えて、いつか縦横の道をはさんで立ち並んだのである。荒物屋あり、酒屋あり、八百屋あり、魚屋ありで、面白いことに中央には浴場まで出来たことだった。(中略)震災前の下町のどこかの町がそっくりそのまま移転してきたような光景だったのである。また飲食店は別の一郭にあった。音楽堂の裏側、心字池(しんじいけ)のほとりに集まっていた。だがこれも喫茶店、そばや、汁粉屋、ミルクホールなどが多く、酒を飲ませる店はあってもごく少数だったように思う。寿司屋、天ぷら屋などは何故か見かけなかった。だから此の小さな町は静かだった。朝私が通りかかる頃、軒先きに七輪を持ち出して火をおこしている女の人の姿など見受けられた。夜は夜で仕事を終った男の人たちが、ところどころにたむろして談笑している光景など平和そのものだった。」

多賀自身は、親族の経営する丸ビルの花月食堂が、ようやく再開し、丸ビルに通い出した。「壁面の大理石が落ちた程度で、丸ビルには大きな被害はなかったらしい。一方復興の仕事で人びとは町に溢れた。そして焼け跡で食事を採ることに苦労した。焼け木杭に立ち退き先や尋ね人の木札が打ちつけてある町角の、よしず張りの屋台でうどん、すいとん、ゆであずきなどが五銭、十銭で売られていたが粗末なものだった。丸ビルへ行く。丸ビルへ行けば何かあると、人びとは集まったのである。そして、オフィスビルは時ならぬ小さな盛り場に変貌したのである。(中略)だから花月の店も一日に何回かは表戸を閉じて客止めをする盛況だった。しかしメニューは再開してからしばらくは牛丼だけ、それも食券制で、やがて他の丼物やお弁当、定食と順次品数を増やすことが出来たのは、その年も暮れる十二月ごろだったと思う。私の父なども『花月の暖簾で牛丼を売ろうとは思わなかった。』と苦笑いしていたことを覚えている。後から父に聞いたことだが、この牛丼には三菱の地所部が難色を示したらしかった。だが米を確保するだけでも非常な努力がいる上に、副食物のすべてが入手困難という事情を説明して、ようやく了承を得たのだということだった。」

岸井良衛「大正の築地っ子」には、小田原から知人夫婦が築地に出て来て、焼け跡に小料理屋を出したという記述がある。「一時は素人の俄か仕立ての食べ物屋がたくさんに生まれたが、世の中が少しおさまってくると味が判って来て、本職の店に集まるようになった。(中略)同時に、これまで日本橋にあった魚河岸が築地へ移って来たので、いよいよ店は繁昌をした。」

4. 考察

<携行食料および飲料>

避難の際に食料や飲料を持ち出した人々では、やかん、ご飯の入ったおひつ、おにぎり、梅干し、たくあん等の漬物を持ち出したという記述が見られる。「大地震に生きる一関東大震災体験記集―」全体の抽出ワードで見ると、72体験記中で「おにぎり」は19、「米・玄米」は6、「おひつ」は3、「ご飯」は2の体験記に登場している。「梅干」「たくあん」などの漬物は12である。

当時は朝に一日分の米を炊いておひつに移し、昼も夜もおひつのご飯を食べていた⁷⁸⁾が、発災が昼食の時間

帯であったため、食事の支度中あるいは食事中のおひつを抱えて逃げ、おひつのご飯をおにぎりにしたと考えられる。

岸井良衛「大正の築地っ子」に回想として、「僕たち子供のころの食事のおかずというものは、現在と比べてみたら、大変に粗末なものであったと思う。これは僕だけではないらしく、先日、舞踊会の稽古をしている時に、古い人たちとの話の中で、『昔は粗食だった』ということが話題になった。(中略)よく粗末な食事のことを一汁一菜というが、大正時代は、一汁か一菜かであった。(中略)たとえば、魚が一人前つけば、汁はつかなかった。あとは、古漬けか新香の、糠味噌か塩づけの漬物だけであった。」という記述がある。今でも「ごはん」という言葉は「食事」と「炊いた米」を意味するが、当時の質素な食事というのは、わずかな副菜でご飯(炊いた米)を食べることが中心であった⁸⁾。そうした食生活であった当時の人々にとっては、食べられなければすぐ命に係わるので、震災時も、避難するときに、とっさに、おひつのご飯、おにぎり、そして、たいてい常備している梅干しやたくあんなどの漬物を持ち出したと考えられる。

こうした行動には、当時の人々が持つ飢餓への危機感が表れている。ただし、食料を備蓄していたという記述はいずれの文献資料でも見られなかったので、非常事態に備えた非常食の考え方はなかったと考えられるが、関東大震災から55年後の「大地震に生きる―関東大震災体験記集―」では、全105中25の体験記で、被災直後の食の困難からの教訓として、1978年時の[提案]に食料備蓄をあげている。

さらに、「二、水は、実になにもまして大切であり、確保すること。」(23歳(教文館に勤務)被災地:京橋区銀座四丁目)という記述があるように、水の必要性についても21の体験記で[提案]に水の必要性をあげている。

発災当日の1923(大正12)年の天候について振り返ると、前日の台風の影響もあり東京付近では未明に強い雨が降り、午前中に上がっていたが、曇りがちで蒸し暑いところに、強い風も吹いていた⁶⁾。地震発生後に起きた火災はこの強風に煽られて燃え広がった。暑い日であったところに火災による温度上昇により、逃げ惑う人々はやがて喉の渇きに苦しめられた。不忍池の水を飲んだ様子が記述されているが、飲料水が手に入らなければ何時の時代でも同様の困難に合うことは明白である。

<食支援>

いわゆる民間の支援についての記述が目立つ理由については、以下のように推測する。発災当日より東京府・東京市および各区は直ちに緊急対応を開始したが、備蓄がなく、炊事道具不足や停電、また区庁舎を焼失した区もあり食支援は困難であった⁶⁾。火災の収束する9月3日まで、安全な避難場所と思い逃げ込んだ場所で、多くの避難者が焼死した。面積が10haあった被服廠跡では40,000人も死者が出た⁶⁾。体験記を読むと、危険を感じて避難場所を転々と移動している記述が見られる。このような混乱状態の中、社寺境内や華族、富豪などの邸宅が解放され、炊出しや配給が行われた。それでも、東京市の人口約220万人⁶⁾に対して避難者の数は107万人以上(各避難場所の人数⁶⁾から推計)と大変多かったため、被災者の大半は親類縁者の援助に頼らざるを得なかった。頼るあてがなく、仕事も失った人は郷里など

へ去った。汽車移動中は駅や鉄道沿いから食べ物の提供を受けて疎開した。避難者は駅だけではなく、一般の人々に支えられたのである。このように、行きずりの他人から食べ物を提供された思い出は強く記憶に残ったと考えられる。郷里へ向かう汽車の窓から食べ物や慰問品を送られた人(12歳(小学生)被災地:下谷区(台東区)竹町)は、「この愛情の温かさは、五十有余年を経た今日でもはっきりと心に刻みつけられて忘れることがない。」と記述している。

また、体験記の中にも「岩崎さん」「後藤新平さん」といった名前が見られるが、当時の階層社会における華族など富裕層と庶民との関係の側面が垣間見える。被災した平民は迷うことなく大きな邸をめぐして逃げ込み、一方、邸宅側でも逃げて来る人々を受け入れて、食料を配給するなど世話をしている。庶民は富裕層を頼りにし、富裕層は周囲の面倒を見るべく行動している。現代の日本社会とは異なる社会構造の中で、封建時代の名残りの部分とも見えるが、富裕層はある種の公的な役割を果たすところがあったと考えられる。

<調達困難>

被災直後では、商人が米を売らなかった、米の値段が上がった、という記述がみられる。染川藍泉の妻は直後に米屋と交渉して玄米を買いしのだが、染川は商人たちの様子を厳しく非難している。鹿島龍蔵も米の不足による世情不安定を心配して米屋に会おうとするが、最初は店が閉ざされていて主人と会うことができなかった。

関東大震災時は、政府は非常徴発令を公布して米を徴発または購入するなどして、9月6日からは東京市中の公設市場、7日からは市内主要白米商店で白米・玄米を売り出せるようにした¹⁰⁾。また、暴利取締令を公布して食料品等の11種を指令して安定供給を図った¹⁰⁾。

物価の上昇についても現代の被災生活と共通するものがある。筆者は仙台市で東日本大震災(2011年)の被災食生活の調査を行ったが¹¹⁾、肉や玉子、野菜などの生鮮食品の値段が高騰し、住民の怒りを買った商店もあり、全体的に2割、3割高くなっていたという発言があった¹¹⁾。被災地域での需給・物価の安定を図ることは引き続き困難な課題であると考えられる。

<復旧の動き>

やがて急ごしらえの屋台がたくさん出来た。染川藍泉「志んさい日誌」によると、「滑稽なことには、浅草仲見世の玩具屋絵草紙屋までが悉く食ひ物屋に変じた」という。しかも不衛生な店舗があり蚊と蠅が非常な勢で増えたが、そのような店にも入る客がいた。被災地でも保健所の衛生指導が厳しく行われる現代では起こりえないことであるが、人が「食べる楽しみ」から逃れられないという点は何時の時代でも共通する。多賀義勝「大正の銀座赤坂」では、徐々に復興して行く中で、やはり本来の美味しい食事を提供する店が繁昌して行く様子が描かれている。また、「大正の銀座赤坂」では、日比谷公園に立ち並んだバラックの中に、「荒物屋あり、酒屋あり、八百屋あり、魚屋ありで、面白いことに中央には浴場まで出来」、「震災前の下町のどこかの町がそっくりそのまま移転してきたような光景だった」という記述がある。別の一角に「喫茶店、そばや、汁粉屋、ミルクホールなど」が集まり、「夜は夜で仕事を終った男の人たちが、ところどころにたむろして談笑している光景など平和そのものだった。」という記述からは、ある種の災害ユー

トピアが出現していたとも考えられる。この災害ユートピアでは商店や飲食店が果たす役割が大きかったと考えられる。

また、「大正の銀座赤坂」では、復興のために働く人たちが焼け跡で食事に苦勞し、粗末な食事では満足できず、美味しい食を求めて丸ビルへ押し寄せて大盛況となる様子を記述しているが、いかに食事が復興の活力を生み出しているかがうかがえる。

<今後の課題について>

「大地震に生きる―関東大震災体験記集―」、「志んさい日誌」「天災日記」、「大正の銀座赤坂」および「大正の築地っ子」より食に関する記述を抽出し、分類・整理し、関東大震災時の被災食生活について考察したが、多くの人が火災を逃れつつ体験した飢えや渴きは筆者の想像をはるかに超えて厳しく苦しいものであった。50年以上経過しても体験者が指摘する水の備え・食の備えは、現在と共通する重要な課題である。当時は東京市の人口の半分近い数の人が避難者となり食の困難に直面した。100年後の東京都の人口は1千400万を超えており¹²⁾、首都直下地震など大規模の災害が発生した場合に、避難者は断水・停電の影響を受けて発災2週間後に最大で約720万人発生すると想定されている¹³⁾ため、この課題に対して強い危機感を持ち取り組まなければならない。

また、身分制社会であった大正時代では、富裕層による救済があったが、平等社会である現代においては、被災市民の世話をするのは基本的には行政とされている。ボランティア活動が発展して来ているとはいえ、関東大震災時と同様に東京都の人口の半分もの膨大な数の人が避難者となると想定されており、こうした避難者の食の世話という膨大な負荷を行政やボランティアで負い切れるものであるかどうかは不明である。100年の間にすっかり食生活が豊かになり、飽食の時代となった。しかし大規模な災害で被災すれば食生活のレベルがどん底に突き落とされ、100年前と同様の困難に直面する可能性が高い。関東大震災の体験者の記述からは、現代と異なる社会、食生活であっても、現代の東京で被災した場合にも危惧される食の危機的状況が起きていたことが示唆されている。100年の間にすっかり変化した東京でいかに大災害を乗り越えるかを、あらゆる可能性について検討しなければならない。

謝辞

本研究は一般社団法人日本災害食学会の2023年度学術大会の大会企画の一部として行われたものである。

本研究を計画するに際して、公益社団法人全国市有物件災害共済会 防災専門図書館の矢野陽子氏に文献資料について様々なご助言とご協力をいただいた。ここにお名前を記して感謝を申し上げる。

参考文献

- 1) 東京都品川区．大地震に生きる―関東大震災体験記集―．1978. 03.
- 2) 染川藍泉．震災日誌．日本評論社，1981.
- 3) 武村雅之編著．天災日記 鹿島龍蔵と関東大震災．鹿島出版会，2008.
- 4) 多賀義勝．大正の銀座赤坂．青蛙房，1977.
- 5) 岸井良衛．大正の築地っ子．青蛙房，1980.
- 6) 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会．1923

関東大震災報告書 第1編．2006. 7.

- 7) 江原絢子，石川尚子，東四柳祥子．日本食物史．吉川弘文館，2009. 07.
- 8) 食の専門家Blog. 入門 食の社会学 日本食の伝統 20 明治、大正、昭和前期の家庭食． Accessed 2022. 08. 12.
- 9) e-Stat. 統計でみる日本．大正9年国勢調査． Accessed 2023. 06. 24.
- 10) 長井修吉編 大正震災記録編纂会．大正震災記．1923. 11.
- 11) 守真弓，佐藤美嶺，守茂昭．災害エスノグラフィーによる仙台市の被災食生活実態調査．日本災害食学会誌 VOL. 3 NO. 1, 2016. 03.
- 12) 東京都ホームページ．「東京都の人口（推計）」の概要（令和5年4月1日現在）．総務局報道発表資料2023年04月26日． Accessed 2023. 05. 18.
- 13) 内閣府 中央防災会議 首都直下地震対策検討ワーキンググループ．首都直下地震の被害想定と対策について（最終報告）別添資料1． Accessed 2023. 09. 08.